フランス語の祭典

国際フランス語教授連合
第9回世界大会記録

フランス語の祭典

江苏工业学院图书馆
藏书章

国際フランス語教授連合
第9回世界大会記録

ご挨拶

1998年7月14日

国際フランス語教授連合
名誉副会長 **加藤晴久**

謹啓

時下ますますご清祥の段お慶び申しあげます。

1996年8月、慶應義塾大学三田校舎において開催されました国際フランス語教授連合第9回世界大会につきましてはさまざまな形でのご支援ご援助をいただき誠にありがとうございました。

たいへん遅れましたが、実行委員会の記録をお送り申し上げます。

同世界大会の学術的成果は先に«*Actes du IXe Congrès mondial des professeurs de français*»(FIPF, 1997, 494p. 全巻仏文)として刊行されました。

本記録集は、世界大会開催の準備・実施にあたりました者たち、また、世界大会に参加した者たちの証言と、世界大会に関係するその他の文書を収録した書物でございます。

「あらずもがな」というご意見もあるかと存じますが、まず第一にわたくしどもは、百数十年にわたる日本のフランス語の学習・教育の歴史において、世界の110国から1000人のフランス語教員が集うという、画期的な行事を準備し実施した経過の記録を残したいと考えました。

この文集は、あのアヴァンチュールをともに生きたことによって固い友情と連帯感に結ばれている者たちの生の声を集めたものでございます。

第二に、わたくしどもの体験を具体的に書きとどめておくことは、今後、この種の国際会議を計画する各界の人々になんらかのお役に立つこともあるのではないかと考えました。わたくしども自身、ドイツ語・文学国際学会の東京大会（1990年）と国際比較文学会の東京大会（1991年）の先例に教えられ、また、国際コンベンション誘致センターが開催したセミナー、同センターが発行した『国際会議マニュアル』等から大いに学びながら世界大会の準備作業を進めました。

わたくしのもとにはいまだに横浜、大阪をはじめとする各地のコンベンション・ビューローから資料が送られてまいりますが、長引く不況にもかかわらず、実に数多くの、また実に種々様々な、大小の国際会議が開催されていることに眼を見張ります。

21世紀の日本の宿命とも言うべき流れではないでしょうか。

FIPFの世界大会もそのような歴史の方向に沿ったものであったとするならば、あの苦労も十分に報いられたと考えている次第でございます。

目　次

ご挨拶 ……加藤晴久 ……2

第1部｜フランス語の祭典【舞台裏】

偶感 ……朝倉　剛 ……8
FIPF東京大会の歴史的意義 1970年代・80年代の大会との比較に於いて ……松本悦治……11
世界大会の思い出 ……小林善彦……13
大きな遊び ……加藤晴久……15
PETIT THEATRE PERSONNEL DU IXème CONGRES MONDIAL DE LA FIPF A TOKYO. ……Jean Maiffrédy……62
国際フランス語教授連合第9回世界大会を終えて ……筑紫文耀……66
私的実務日誌に映った世界大会 ……平野和彦……74
募金活動に従事して ……目黒士門……96
プログラム作成と大会の学術活動 思い出すことと感想……中山眞彦……99
プログラム委員会のメンバーとして ……長野　督 ……106
草月会館・行事報告書 ……川田靖子 ……108
一般向け文化行事小委員会活動報告 ……石崎晴己 ……119
出版社展示の準備と実際 付：作家サイン会風景……会津　洋 ……131
宿泊・輸送小委員会の運営報告と感想……越坂部則道 ……134
FIPF世界大会の舞台裏雑感 ……橘木芳徳 ……150
エクスカーション部門報告 ……西田俊明 ……163
人事管理・総合案内を担当して ……立花英裕 ……169
情報処理及び録画報告 ……山崎吉朗 ……177
入国査証申請のための書類作成 ……目黒士門 ……190
受付苦情処理係の小部屋から〝世界の同僚の皆さん、こんにちわ〟ビザ関係書類、登録受付、苦情処理……西尾和子 ……194
私の世界大会 ……西尾治子 ……199
世界大会の裏方の裏話 ……金原礼子 ……205
接遇の日々 ……野村二郎 ……208
友を迎える喜び 成田空港での出迎え ……目黒士門 ……210
成田空港第2ターミナルビルでの出迎え業務について ……東松秀雄 ……213
立ち続けた一日 ……伊賀山かおる ……215
荻野雅子 ……215
水野美恵子 ……215

FIPF世界大会・宿帳こぼれ話 ……塚越敦子 ……216
宿泊係を担当して ……時崎裕工 ……220
世界大会を振り返って ……常盤僚子 ……221
会計としての世界大会 ……長澤宣親 ……223
世界大会の思い出 ……増茂和男 ……225
世界大会をお手伝いして ……寺田まり子/ariko ……226
FIPF世界大会にボランティア参加して パソコン通信がくれたチャンス、国際会議としての反省 …山本淑子 ……230
草月会館手伝い(1) ……中野由美子 ……234
草月会館手伝い(2) ……川田つる ……236
ボランティアとして ……佐藤裕毅 ……237
FIPF日本大会ボランティアとして ……西沢栄美子 ……238
大会にボランティアとして参加して ……佐々木恭子 ……239
国際フランス語教授連合世界大会ボランティア体験記 ……山永孝子 ……242
国際フランス語教授連合第9回世界大会参加報告書 ……佐藤紀子 ……244

第2部|フランス語の祭典【表舞台】

FIPF世界大会に参加して ……泉　邦寿 ……248
21世紀にむかって「実業フランス語」のシンポジウムに参加して ……岸　達也 ……250
生の声 国際フランス語教授連合第9回世界大会に出席して ……原野　昇 ……251
フランス語圏文学をめぐる二つのシンポジウムから ……元木淳子 ……253
コミュニケーション・オリンピック ……山本明美 ……255
母国語としてのフランス語と外国語としてのフランス語とは ……北山研二 ……257
FIPF東京大会に参加して ……青井　明 ……260
司会について私が知っている二、三の事柄 ……神田大吾 ……262
私の体験した世界大会 ……大木　充 ……263
Quelques impressions sur le IXe Congrès de la F.I.P.F. ……Solange E. Naito ……264
大会プログラムについて ……武末祐子 ……266
21世紀のフランス語 未来を拓く 違いを耕す 国際フランス語教授連合第9回世界大会記録 ……鹿瀬颯枝 ……267
世界との遭遇！ ……井上美穂 ……269
Communications de tous les jours ……粕谷祐己 ……271
世界大会の印象 ……野村訓子 ……274

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

遊歩するヴォランティアの記 ……澤田　肇 ……276
各国の女性とのお喋りで考えたこと ……村島実恵子 ……278
孤立した文明国・日本を理解してもらうために ……長谷川泰司 ……280
アジアの熱気 Forum Asie-Pacifique,Commission Asie-Pacifique 報告 ……稲垣文雄 ……282
アジアの夕べ アジア諸国の先生がたをお迎えして ……目黒士門 ……284
フランス語の普及のために何をなすべきか？ Table Ronde:LES POLITIQUES DU FRANCAIS 報告 ……三浦信孝 ……285
フランス文学をクレオール化する？ フランコフォン文学の問うもの
Table Ronde "LITTERATURES FRANCOPHONES"報告 ……三浦信孝 ……290
文化講演会「フランス語と私の作品」講演内容（作成：石崎晴己） ……青野　聰 ……295
小川国夫 ……299
吉田加南子 ……302
なだ いなだ ……305
荻野アンナ ……308
日仏文化交流史展 ……富田　仁 ……314
日仏交流史展を省みて 写真展示関係 ……西堀　昭 ……321
日仏交流のあけぼの —教育— ……西堀　昭 ……326
日仏交流のあけぼの —軍事— ……滑川明彦 ……327
日仏交流のあけぼの —宗教— ……小河織衣 ……328
日仏交流のあけぼの —文学— ……赤瀬雅子 ……329

第3部｜世界大会カレードスコープ

日本フランス語教育学会の国際活動（作成：西崎愛子）……332
FIPF第9回世界大会に関する記事・報道一覧（発表順）（作成：三浦信孝） ……334
国際フランス語教授連合第3回世界大会参加報告 ……松本悦治 ……336
国際フランス語教授連合第4回世界大会参加報告 ……松本悦治 ……337
国際フランス語教授連合第6回世界大会参加報告 ……松本悦治 ……338
国際フランス語教授連合第7回世界大会参加報告 ……朝倉　剛 ……341
国際フランス語教授連合第8回世界大会参加報告 ……朝倉　剛 ……342
日本式語学教育に〝功罪〟仏語教授連合世界大会に参加して ……加藤晴久 ……344
中国のフランス語教育 ……加藤晴久 ……346
北京のフランス語教育事情 文学より実用を重視 ……大高順雄 ……348

IXe CONGRÈS MONDIAL ……Annie Monnerie-Goarin ……350
Le rayonnement de la francophonie……Margie Sudre ……351
FIPF Journal du Congrès No.1 Bienvenue à Tokyo……Haruhisa Kato ……353
FIPF Journal du Congrès No.2 Une inauguration en fanfare …Patrick Rebollar……354
FIPF Journal du Congrès No.4 AU TRAVAIL! ……356
FIPF Journal du Congrès No.5 Intervention à Sogetsu ……359
FIPF Journal du Congrès No.6 Huit auteurs en quête de francophonie……361
FIPF Journal du Congrès No.7 EXCURSION A NIKKO ……363
FIPF Journal du Congrès No.8 Elections:un président et deux vice-président(e)s ……364
FIPF Journal du Congrès No.9 Le discours de Henri Lopes ……368
FIPF Journal du Congrès No.10 INTERVIEW D'YVES SIMON ……371
Rapport moral du Président IXe congrès mondial-Tokyo-……Raymond LE LOCH ……374
TÔKYÔ, ET APRÈS... ……Annie Monnerie-Goarin ……377
LE IXème CONGRES MONDIAL DE LA FIPF ……Titus Ogavu ……378
機関誌写真複製　フィリッピン -Lettre de L'APFP-……381
LE IXe congrès mondial de la F.I.P.F. au Japon ……Choi Kim Yok ……382
IXe CONGRÈS DE LA FIPF TOKYO 25-31 AOÛT 1996……Gunhild Kihlberg ……384
L'utile contre l'agréable ……Lise Bissonnette ……387
LE FRANÇAIS DANS LE MONDEの写真複製……389
インターネット熱に英語優位主義の恐れ……中沢けい ……392
写真複製　朝日新聞 ……394
写真複製　読売新聞 ……筑紫文耀 ……396
言語と文化の多元主義のために 均衡とれた世界認識へ英語以外の語学学んで …加藤晴久 ……397
フランス語圏作家達の結集 英語の一言語支配に抵抗 ……石崎晴己 ……398
正統派のヨーロッパ文学を受け継ぐ作家 イスマイル・カダレ ……中村　要 ……400
クレオール語を文学の言語に定着させた作家 ラファエル・コンフィアン ……恒川邦夫 ……403
フランス語を侵犯しつつ美を作り出した作家 タハール・ベン・ジェルーン …澤田　直 ……405
ロシア的時空をフランス語で描いた作家 アンドレイ・マキーヌ ……立花英裕 ……407
フランス語でアフリカを探し続ける作家 アンリ・ロペス ……加藤晴久 ……409

第1部

フランス語の祭典
【舞台裏】

偶感

朝倉 剛 獨協大学

1993年6月27日（日）の『日誌』に，私はこう書いている．「早朝9時前，パリ出張中の加藤さんから電話あり．F.I.P.F.の常任理事会にて，13対10の得票をもって，レバノンを圧し，第9回世界大会の東京開催決定．一瞬，身の引き締まるのを覚ゆ．日本経済の混迷，不安……西崎さん，稲垣君より電話あり．あわただし……」

その一カ月足らず前，玉川大学において開かれた春季大会総会では，世界大会の東京誘致が辛うじて票決されたばかりだったので，手放しでは喜べない心境であった．誰しもバブル崩壊に不安を隠しきれなかったのである．しかし大会をやり遂げることは，亡き小林正先生の御抱負を叶える好機であるし，幕末の仏学事始め以来はじめての大きな意義ある行事でもあるとすぐに思い直した．

大会準備の経過や活動等については，実行委員の方々の詳細な御報告にお任せする．とにかく盛会裡に終わった大会を顧みて，初めの頃の不安は夢のようであり，いまは感謝の気持ちで一杯である．

1.「アジア・太平洋コロキウム」を

私はこれまでに，第7回テサロニカ世界大会，第8回ローザンヌ世界大会，北京外国語学院で開かれたコロキウム(1989年3月)に参加した．第6回以前の大会については，F.I.P.F.の理事をしておられた松本悦治先生が熱心に参加してくださったから，先生の御報告にお任せしたい．

ところで，アジア・太平洋地域からの世界大会参加者は，これまで概して少数であり，総数30名～50名程度であった．私の知る限り国別では，テサロニカに韓国が20名余り，ローザンヌに日本がやはり20名余りの参加者を送ったのが最多かと思う．ところが，今回の東京大会では，日本からの参加者は別として，ヨーロッパ諸国の218名について，アジア・太平洋諸国から192名が来日したのは喜ばしいかぎりである．そして，アジア諸国を含め，宿泊料など若干の援助ができたのは幸いであったし，8月29日に夕食を振る舞い，民族色たっぷりのアジア諸国の歌など楽しみつつ，友好の情を深めることができたのも初めであり，今回の大会における大きな収穫の一つであったと思う．

そこで私は，今後に向けて一つの提案をしたい．これまでにも中国，インドネシア，インドなどアジアの国々においてもF.I.P.F.の活動の一環として，コロキウムが開催されてきた．とくに加藤会長が1989年にアジア・太平洋委員会(Commission Asie-Pacifique)の幹事長に就任されてからアジアとの交流が次第に密になり，北京外国語学院の陳教授をわがS.J.D.F.の大会に招くまでに至った．今回の大会を通して盛り上がった気分が醒めないうちに，第10回パリ世界大会以前に「アジア・太平洋コロキウム」を日本で開催することを提案したいのである．

そうはいっても，コロキウム実行委員会の組織，規模，テーマ等，準備はやはり並み大抵ではなかろう．日本がわの参加者は別にして，アジアを中心に100名ないし150名程度の規模，1989年の北

京大会がモデルとしてふさわしい.

内容は今回の「未来を拓く」,「違いを耕す」に則し，フランス語教授法，フランス文化をめぐってコロキウムを開き，それぞれの文化を開花させることへの布石，すなわち共存共栄への第一歩であり，第10回世界大会への弾みとなるにちがいない.

現在私が所属している第16期日本学術会議でも，「アジア学術会議」を毎年開催し，アジア諸国における現在の学術の動向，未来における科学・技術の展望等について，熱心な討議が続けられている．参加国は北朝鮮を除くアジア12カ国で，それぞれ2名ないし3名の代表が参集しており，太平洋地域の代表の参加もある．学術会議会員，教育学専攻の堀尾輝久氏は「差異（違い)」について，「……差異を超えての普遍と共に，差異を貫いての普遍的なるものへの感覚の方が，これからはいっそう重視されなければならない」(注1)と書いておられるが，指針として当を得た言葉だと思う.

2. La diplomatie de l'esprit

昨年アカデミー・フランセーズ会員に選ばれた，コレージュ・ド・フランス教授，マルク・フュマロリ氏は，その著書『精神の外交』(注2）のなかで，次のモンテーニュ『エセー』III-8 "De l'art de conférer"を援用しつつ，真の会話・対話の精神を論じ，ひいてはそれが17，18世紀における「散文」(prose)の時代を導いたとしている.

「我々の精神は強力な統制ある精神と交わることによって強められるが，下等で弱々しい精神と絶えず交際することによってどれほど損害をこうむるか口では言えない.」(注3)

フュマロリ氏は，この「強力な統制ある精神」(les esprits vigoureux et réglés)を単なる社交性を超えた精神，すなわち共通感覚(le sens commun)を重んじ，「"良き疑問"を自己につきつけながら，それら疑問を同僚たちの協力を得て，新たならしめる精神」と定義づけ，「この精神は人類に共通する論拠(les lieux communs de l'humanité)に適応し，それらを再発見させるほど強力」(注4）であり，こういう精神の交わりがサロン等を啓蒙し，言論に活力を与え，散文を洗練しながら，高度のフランス文化を培ってきたとしている．彼はこれを「精神の外交」と名づけ，モンテーニュ，ヴォルテール，バルザック，サント＝ブーヴといった散文作家の系譜のなかに見ている.

今回の世界大会で開かれた数々の討論のなかに，また8月31日，閉会にあたり総括をされたミシェル・セール氏の講演にも，またアフリカの参加者たちの質問にたいする彼の答弁にも，この「強力な統制ある精神」が感じ取れた．戦後半世紀を経て，曠古の発展への途を辿るわが佛学を担うべく，勝れた語学力を身につけた若い研究者のみなさんにも，こういう「精神」が十分にあると信じて，今後のコロキウム，世界大会で活躍されんことを願ってやまない.

以上が提案を含めての，私のささやかな感想である.

注

1．堀尾輝久，「地球時代とアジア―平和・人権・共生の文化を―」，JSCニュース『学術の動向』1997年 1月号，編集協力／日本学術会議 p.p.22-28.

2．Marc Fumaroli, *La diplomatie de l'esprit-De Montaigne à La Fontaine-*, Hermann, 1994.

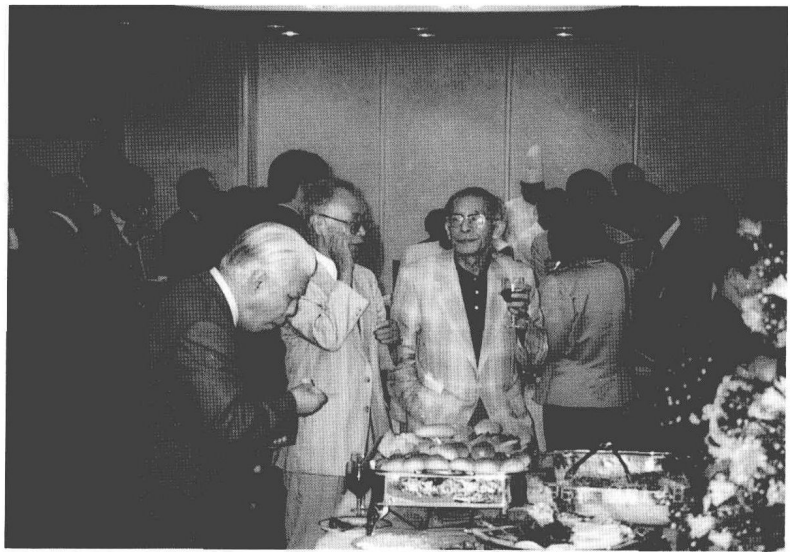
3．Montaigne,*Essais*, III, 8 : "De l'art de conférer", ed. A.. Micha, Garnier-Flammarion,1969, t. III, p.13.

"Comme notre esprit se fortifie par la communication des esprits *vigoureux et réglés, il ne se peut dire combien il perd et s'abâtardit* par le continuel commerce et fréquentation que nous avons avec les esprits bas et maladifs."訳は関根秀男氏による．

4. M..Fumaroli, *op.cit*. p.288.

"Les esprits vigoureux" sont ceux qui se posent les "bonnes questions" et qui sont capables de les renouveler en coopération avec leurs pairs. "Les esprits bas et maladifs" sont ceux qui se contentent de formules toutes faites et d'idées reçues. [中略] le commerce des esprits vigoureux appliqué aux lieux communs de l'humanité, et propre à les faire redécouvrir sous un jour renouvelé".

この定義によれば，「下等で弱々しい精神」とは，既成の形式あるいは，紋切り型の観念から出ようとしない，言い替えれば問題意識のない精神ということになろう．



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

FIPF東京大会の歴史的意義 1970年代・80年代の大会との比較に於いて

松本悦治 アテネ・フランセ

FIPFの第9回世界大会の開催には，開催地が東京と決定してから三年以上の準備を重ねた訳であるが，実は1975年の第三回世界大会の際，ニューオルリンズで非公式ではあるが打診されたことがある．当時FIPFの加盟国は欧米諸国が圧倒的多数を占めていたので，Fédération Internationale の名称が示すように参加国の地域を全世界に広めようという悲願が込められていたのに他ならない．AJPF (現在のSJDF) はその頃会員数も300人以下で，諸般の条件からして東京で開催などとは考えも及ばなかったので，私はFIPFの理事に就任して以来，役員会でその辺の事情を説明し続けて居たのが実情である．

往時を回想すると第三回のニューオルリンズでは中国やソ連がFIPFに参加して居らず，参加国のインド・韓国とも代表を送って来なかった．それ故 Vice-Président fondateur の Auba 氏の要請により，日本代表として赴いた私は理事に就任することになった．

第四回のブリュッセルでは，タイから三名，韓国・台湾・スリランカから一名づつで，私を入れて六名であった．

第五回のリオデジャネイロでは，韓国代表一名と日本代表の一名だけであったが，ブラジルが東洋から見れば地理的に略々対蹠点に当たるので，ある程度止むを得なかったかもしれない．

第六回のケベックでは，北京及び南京から二名づつ代表が見え，日本からも五名参加，私は六年で理事の任期が規約により終わっていたので，この際インド代表がアジアの代表として理事に選挙された．

私が日本代表として参加したのは以上の第三回から第六回迄であるが，聞くところによると，第七回のテサロニカには日本から四名，中国・韓国を合わせて十名程の参加者があったそうである．更に第八回のローザンヌでは，日本から二十二名，カンボジア・タイ・フィリピンを含み東洋から四，五十人の参加があった由である．

以上私の記憶からアジアの参加者数を列挙したのは，今回の第九回大会で200人近いアジアの教育関係者を招いたことが如何に画期的な特色であるかを理解して頂くためである．東京大会の最終日にフランス外務省の代表としてみえたPilhion 氏に招かれた際伺ったことであるが，成功裡に終わった今大会で特筆すべき事と言えば，アジアからの参加者が日本を除いて200人になったことだ，と強調されたことが深く印象に残っている．

次に近代的設備の整った慶応が会場として提供されたこと，しかも一ヶ所に纏まっていた事が東京大会の成功を決定的にしたことは事実である．もっともニューオルリンズでは，国際会議用に設備されたホテルがあり，多くの宿泊者にとっては同じホテルの中二階にある大小十数室の会議室が会場に当てられたため，非常に効率的であったという理想に近い例もあるが，これは例外的である．ブリュッセルの場合は開催大学のprestigeを考慮に入れ，会場をLouvain-la-neuveに移すという

こともあった位で，会場が最初から慶応と決定してから準備に移ったことは極めて重要なことであった．

又エクスカーションにしても，リオのようにカーニヴァルを期待して集まる外国人の気持ちを斟酌し，サンバの大饗宴を催したことは忘れられない好印象を与えたし，ブラジリア・サルバドール・バイア等を観光するツアーには，欧州の参加者が殆ど全員参加するほど人気があった．ケベックではオルレアン島で全員参加のピクニックが綿密な企画の後行われ，親睦を増す意味で大好評を博したが，その一面，中には参加者が殆どなく中止になったものもあった．東京大会の場合はバランスがとれて，日光・箱根・鎌倉と三つとも観光価値が高く，その運営には配慮が行き届いて，全部が相当の人気を博した事は嬉しい．

又文化行事については，大会参加者の半数以上が参集し，日本文化の紹介として十分目的を果たしたと思う．大会の諸行事については，それぞれの運営責任者の方々からの意見が詳しく述べられるであろうから，私はこれ以上言及しないが，Gagnon氏の感想の中に「大中小規模の企画がバランスよく配置されていて，世界大会のあり方に一つのモデルを作った．」とあるので，私としては様々な困難と懸念があったにも拘わらず，東京大会は予想以上の成功を収めたと感じている次第である．強いて言えばブリュッセル大会のように学会参加者名簿を全員に配布出来たら，猶評判が良かったかも知れない．

ともかく創立以来偶数回の年はfrancophoneの国，奇数回の年はnon-francophoneの国で開催するというPhilippart氏（初代会長）・Auba氏（同副会長）の理想が無事に実現され，紀元2000年に世界大会がパリに戻るということになった．まずはめでたしと言わねばならない．

世界大会の思い出

小林善彦 学習院大学

フランス語教授連合の世界大会を東京で引き受けることが決まったのは，玉川大学での日本フランス語教育学会の総会の席上であった．総会といっても，出席者はわずか30名ぐらいの小人数であった．そこでは，加藤晴久会長の提案に対する批判的な意見が相次いだ．「何百人という外国からの参加者の宿舎をどうするのか．」「資金をどうやって集めるのか．」「集まらなかった時には，われわれ会員に過大な負担を強いるつもりか．」「なんら具体的な展望がないではないか．」

こういった議論を聞きながら私は考えた．具体的な計画がきちんとできていないといっても，三年以上も前にできるわけがない．それにアジアで世界大会をやるとすれば，まず日本が引き受けざるをえないだろう．いずれやらざるをえないのならば，気が乗ったいまやった方がいい．そう考えて私は，賛成の手を挙げたのであった．手を挙げたからには，私にも責任があると思った．しかしながら，いま省みるならば，はたして応分の働きをしたかどうか，まことに恥ずかしいと思っている．

その後のことは書けば限りがないから省略して，私の感想をいえば，世界大会は大成功であったと思う．とくに総会では反対されたにもかかわらず，ひとたび決定したからには失敗するわけにはいかないと考えて，実に積極的に働いて下さった方には大いに感謝したい．この世界大会からえた一つの教訓は，人生には決断をしなければならないことが時にはあり，決断がなければなにごとも成らないということであった．石橋をたたいて渡ることもよいが，時には壊された土橋を駆け渡ることも必要なのである．

さて，世界大会の思い出といえば，私にとっては開会式である．というのは，開会式の最後の講演をするという，予想もしなかった名誉をいただいたからである．ところが夏になってから突然，八月にパリへ行ってフランス外務省の対外文化交流の責任者と，東京の日仏会館の問題について，かなり面倒な交渉をし，さらにベルギーへも行かなければならなくなった．そんなわけで，講演の原稿は列車や飛行機のなかで，走り書きで書かざるをえなくなり，同時通訳をしていただいた三浦信孝教授に原稿をファックスで送ったのは，開会式のわずか三日前であった．三浦教授はすぐに読んでくださり，電話で「これは面白いですよ」と感想をのべ，同時にいくつかの用語について，きわめて適切な指摘をして下さった．多くの重要な講演の通訳を経験しておられる人から，面白いといっていただいたのは，私にとって大きな励ましとなった．

いよいよ開会式の当日，発言者として壇上に着席する者は，控え室に集まれというので，大会本部の裏手にある小さな建物におもむいた．ところが，四時になっても始まる気配がない．聞けば，マイクの故障で開会が遅れるという．フランスのウヴリュー大使は「このテクノロジーの国でも，そんなことがあるのか」といって，皆を笑わせていた．来賓の接待役をしていた慶応大学の萩野助教授は，すこしもあわてずに冗談をとばしていた．ようやく四十分も遅れて，やっと開会の運びと

なった時，私はこう考えていた．

第一に，プログラムでは開会式は二時間で，その後レセプションがある予定になっているのだが，式次第を見ると祝辞や挨拶がたくさん並んでいて，とても予定どおりに終りそうもない．そこで講演の原稿は二十分ぐらいと考え，必要に応じて実例や経験を付け加えるように作っておいた．ところが，すでに四十分も遅れているのだから，原稿を読むのが精一杯と覚悟しなければならない．

第二に，参加者たちはすでに長い間待たされて，疲れているだろう．そこで私が原稿をただ棒読みするだけでは，飽きてしまうか，眠ってしまうだろう．したがって，できるだけ早く皆が大笑いするような話をして，会場の目を覚ます必要がある．どんな話をしようか．ひとたび注意を引くのに成功したならば，あとはところどころに，ハッと思い当るような話が組み込んであるから，心配はない．

こんなことを考えていると，アンリ・ロペスの番になって，ユーモアたっぷりの挨拶で会場は大いに沸き，ムードがよくなってきた．やはり彼も，私と同じことを考えていたのだろうか．その後の経過はご存じの通りであるが，開会式でものをいうと，参加者全員が顔を覚えてくれるので，一週間の間，いろいろな国の参加者から気楽に声をかけていただけたのは，予想外の幸せであった．

もう一つ，こんどの大会でもっとも印象深かったのは，若い人が積極的に発表に加わったことである．私が初めてフランス語で，人前で話したのは四十八歳であったが，もっと早く経験を積めばよかったと思っている．その点，若い人たちは古い世代とちがって，こだわりなく上手にフランス語を話すようになっている．これを機会に今後も，国際的な学会や文化交流の場に積極的に出ていって，発言していただきたい．いま日本とフランス語圏の諸国との間に欠けているのは，相手と率直に話しができる人材である．早く経験を積んで，日仏交流の場に出てほしいと思う．

最後に，今回の大会の成功のためには，実に多くの方々が文字どおり献身的に働いて下さった．それは忘れることのできない素晴らしい思い出である．この成功を基礎に，われわれの学会をさらに発展させたいと思っている．

大きな遊び

加藤晴久 恵泉女学園大学

はじめに

国際フランス語教授連合(FIPF)第9回世界大会の日本誘致を思い立ち，準備と開催の責任を担ってきた過程で，「計画概要」とか「募金趣意書」，数々のアッピールやサーキュラー，「報告書」など，日本語やフランス語でさまざまな公式文書を書いてきた．タテマエの議論も新聞への寄稿などで尽くした．そこで，ここでは，世界大会開催にいたるまでの経緯について，できるだけホンネにもとづいた個人的な証言を書きとどめておくことにする．ひとつには，そのほうが今後，何処かで誰かのお役に立つ可能性が高いと思うからである．

慶應義塾大学に負うところのもの

世界大会を成功させることができたのは第一に慶應義塾大学のお蔭である．

会場として三田キャンパスを使用させていただいたことはもちろんだが，前塾長の石川忠雄先生，現塾長の鳥居泰彦先生のご理解とご支援，多数の教職員の皆さんのお力添えがあったからこそ成功させることができた．至難の業であった資金集めにしても，「募金趣意書」に，主催団体の一つとして慶應義塾大学が並び，組織委員長として石川先生，顧問として鳥居先生のお名前があったればこそ，諸機関諸団体諸企業から信頼して貰えたのであることは明らかである．

このことをまず記して，わたくしとしての心からの感謝の意を申し述べたい．

石川忠雄先生にはじめてお目にかかったのは92年10月22日である．

アラン・ドゥコー氏が石川塾長を表敬訪問した際にフランス大使館のナウム文化参事官，メフレディ言語アタッシェ，筑紫の三氏とともに随行した．

大人も子どももドゥコー氏を知らないフランス人はいない．多くのフランス人が氏の歴史物語やヴィクトル・ユゴー伝などの著作を読んだり，また特に，氏が製作・出演するテレビの歴史番組を見て育った．演劇人でもある．『イエスという名の男』『リヨン郵便馬車事件』『自由か死か』など，大がかりな芝居を演出家ロベール・オッセンと組んで製作した．79年にはアカデミー・フランセーズの会員にも選出されている．1988年には第二次ロカール内閣にフランコフォニー担当相として入閣し，91年5月までその任にあった（その間，ミッテラン大統領に随行して昭和天皇の葬儀に参列している）．

わたくしは91年初めに手紙を書き，来日を招請した．喜んで承諾との返事があり，学会の期日に合わせて日取りも決まったのだが，フランスでの公務と重なり，このときは中止になった．閣僚をやめて，より自由になったときに再び招請し，広島大学での学会の機会に実現した来日であった．

ナウム参事官とともにわたくしは，FIPFの世界大会を日本に誘致したい意向を述べ，石川先生に

ご支援をお願いした．ドゥコー氏も先生にフランス語とフランス文化の普及のためにお力添えを要請して，側面から援護してくれた．

日本開催が決まり組織委員長をお引き受けくださった石川先生は，「ぼくはどんなことでも名前だけ貸すようなことはしないよ」と筑紫氏におっしゃってくださったそうである．最初から最後まで，暖かいご配慮をいただいた．ほんの一例を挙げるが，橋本首相のメッセージをお願いするについてお口添えをいただいた．また，東芝の青井舒一会長にご紹介いただいた．組織委員をお願いに筑紫，川田靖子両氏と参上したとき，青井会長は「わたしは石川先生の頼みは断ることができないのですよ」と笑われた．そして，東芝本社ビルの，東京湾を一望に見下ろす広いサロンにご案内くださり，「ここを外国からのお客のためのレセプションに使ってもいいですよ」とおっしゃってくださったのだった．青井会長は96年末に急逝された．心からの哀悼の意を申し述べたい．

鳥居先生にお目にかかることができたのは，96年4月4日のことであった．一年も二年も前から，ご挨拶に参上したいと切望していたのだが，その機会をつくってもらうことができなかった．大会まで半年足らずになって，これ以上失礼を重ねてはいけないと，小林善彦先輩に強く諭されて，思い余って3月17日直接お手紙を差し上げた．朝倉剛，小林路易両先生，筑紫氏にご同道願った席で，「加藤さん，お手紙は拝読しました．ホスト校としての責任は果たします」と，力強くおっしゃっていただいたときには感激で胸がいっぱいになった．それまで，わたくしの焦りによる勇み足でご不快をおかけしたことも度々であったと思う．不本意ながら無礼を重ねてきたこともあったに違いない．重く沈殿していた心苦しい思いが先生の一言で，いっぺんに氷解した．なんとも有り難いお言葉であった．

慶應義塾では大ホール改装計画をわたくしどもの世界大会に合わせて前倒しにして実施してくださったとうかがっていた．その，すっかり装いを新たにした518番教室で開会式が行われたのであるが，最新のハイテク設備の予期しない故障で式の開会がかなり遅れた．鳥居塾長は歓迎のスピーチのなかで，アドリブで，その事故にからめて戦中戦後の同講堂の歴史をユーモアを交えて語られ，満場の雰囲気を和らげてくださった．そして，そのあと，109カ国からの650人の参加者を含む人々を招いた歓迎レセプションを主催してくださったのである．

鳥居先生のお言葉をいただいたあとは，わたくしどものお願いを関係の方々に遠慮なく申し上げることができるようになった．世界大会とその後のジャック・シラク大統領の慶應訪問を担当された小谷津孝明理事にも高山鉄男氏の口添えを得てお目にかかることができた．大会期間中をつうじて，全体の円滑な進行を確保するため，要所要所で行き届いた細やかなご配慮をいただいた．

フランス文学科の主任教授である高山鉄男氏はわたくしの40年来の親友である．1956年4月に日仏学院で知り合い，2年間週3日，同じクラスで学んだ．58年の夏は，野沢温泉に一緒に出かけ，高山氏はバルザックを，わたくしはサント＝ブーヴを読んで過ごした．最初のフランス留学の時期

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com